

本書は、自然環境と人間とのかかわりあいの中に先人の知恵を探る環境民俗学の確立を標榜する。それは4つの視点により構成される。第1は、環境をうまく生活に利用する伝統社会のカラクリを見つけ、近代化の意味を問う視点である。船運を媒介とする暮らしの連鎖（資源の循環）と近代化にともなうその崩壊を追求した出口晶子（CH.1）、村の土地利用を制約する様々な社会規制とその濃淡にともなう土地所有の公私境界の変化を指摘した藤村美穂（CH.7）、などである。第2は、環境と人間とのかかわりを伝統・近代化の価値基準にとらわれず、客観的・動態的に理解しようとする視点である。伊藤廣之（CH.3）によれば、川漁師にとって環境は漁獲対象としての魚と漁場という空間の2つである。魚には住处と動きにかかわる自然を見抜く漁師の経験が、漁場には互いに競り合う同業者との関係が各々結びつく、という。脇田健一（CH.4）は一人の小農の子が魚に魅せられ漁師を仕事に選び、腕と経営感をみがき、湖川漁業の困難を切り抜けるプロセスを、環境への適応の判断力に焦点をあて跡づけている。第3は、環境と人間とのかかわりの背後にある人間相互の関係に着目する視点である。高橋理恵子（CH.5）は魚を媒介とした商人と消費者の関係を、大槻恵美（CH.6）は瀬川清子説の検討を通じてフェミニズムの立場から女性の漁業労働に言及する。ただ、両者とも分析が不足している。第4は、環境民俗学の成立のための方法論を確立しようとする視点である。鳥越皓之（CH.1）は柳田国男の環境論に多面的なスポットライトを浴びせ、その重なりの中に全貌を浮かばせ得ると主張する。それによれば、柳田は自然の中にたましいを視る。人々が礼節をもって自然に働きかければ、両者は根底的にひとつにつながって、人々の生活の安定と美しい自然が再生・循環する。安室知（CH.9）によれば、「風土」という言葉は自然の認識とそれへの働きかけの2レベルを含み、かつ人により各々異なった思い入れのある概念である。それ故、風土を取り上げれば、思い入れのバイアスを明示しつつ人々の環境概念をも取り出すことができる、という。嘉田由紀子（CH.8）は鳥越、安室の提示した方法論を事例研究として見事に結晶してみせた。氏は、ある家のゴエモンプロが残された理由を、時々の自分の調査バイアスを明示しつつ、多様な関係者からの聞き取りを通して追究している。そこに黒光るゴエモンプロがある家族の生活のアイデンティティの象徴となり、地域の人々との交流の中で共同的な語りとなり伝承されてきたプロセスが明らかにされるのである。

民間伝承を無味乾燥に収集し型通りに解釈する民俗学の通弊に抗して、歴史的生成プロセスを重視し、その現代的意味を問うことを共通認識としつつ、感性のままに各自の構想を語ったのが本書である。データの質を問い直し、等身大の人間を理論の中に組み込もうとする前衛的な社会科学諸説と軌を一にする試みであり、後続論文の輩出を期待したい。